

読書記録 レイチェル・カーソン著、青樹築一訳『沈黙の春』（新潮社）

2025 年 8 月 11 日

浦上 清

猛暑が続くなかで、[レイチェル・カーソン著、青樹築一訳『沈黙の春』（新潮社）](#)を読了し、8月7日に都内で開催された私的な読書会「思史の会東京」に参加した。Rachel Carson, *Silent Spring*, Houghton Mifflin, 1962 は、農薬の無差別使用が環境と人類に及ぼす危険について多くの聴衆に警鐘を鳴らし、私たちの空気、土地、水に影響を与える法律に革命的な変化をもたらした。以下は私の読書記録であり、この書に関する私の個人的なメモである。

## 1. 時代背景とレイチェル・カーソンの訴え

1962 年の刊行当時、アメリカは冷戦下にあり、また国内では科学技術の進歩、特に化学薬品（農薬や殺虫剤）の利用が産業や農業に劇的な変化をもたらしていた。DDT に代表される化学薬品は「奇跡の物質 miracle substances」ともてはやされていた。

一方で、その見えない副作用、特に生態系や人体への影響が社会的な認識に乏しかったことが、レイチェル・カーソンの告発により強く印象づけられた。カーソンは単に科学的事実を列挙するのではなく、「詩的かつ冷静な論理」で読者に訴えかけ、当時、彼女の言動については、Citizen-Scientist（市民科学者）や Scientist-Poet（科学者詩人）などの叙述がなされていた。

例えば、8 章「そして、鳥は鳴かず」では、沈黙した春の象徴としての「鳥の不在」が語られ、まさに読者の感性に直接訴える構成となっている。害虫駆除の折などに、根絶 Eradication という言葉も多用されていたこと（第 10 章）や第 11 章最終パラグラフの「私たちはボルジア家の客の二の舞を演じようとしているのだ」などのフレーズが耳に残る。

第 12 章「人間の対価」、第 13 章「狭き窓より」などを経て第 16 章「迫りくる雪崩」、そして第 17 章（終章）「別の道」となる。最終パラグラフは「おそろしい武器を考え出してはその鋒先を昆虫に向けていたが、それは、ほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていたのだ」（It is our alarming misfortune that so primitive a science has armed itself with the most modern and terrible weapons, and that in turning them against the insects it has also turned them against the earth.）で終わる。

## 2. 政治への波及と法制度の礎

1962 年秋にレイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版されると、同書は大衆の大きな関心と激しい批判に直面した。ジョン・F・ケネディ大統領や内務長官スチュワート・L・ユダルをはじめとする多くの政府指導者はカーソンの主張を受け止め、1963 年、科学諮問委員会を設置した。レイチェル・カーソンは、ケネディ政権の科学諮問委員会で証言し、委員会は 1963 年 5 月 15 日に報告書を発表し、レイチェル・カ

ーソンの科学的主張を概ね支持した。ケネディ氏の暗殺後、彼の政策を受け継いだリンドン・ジョンソン大統領はその思想を政策として具現化し、数多くの環境保護法を成立させた。

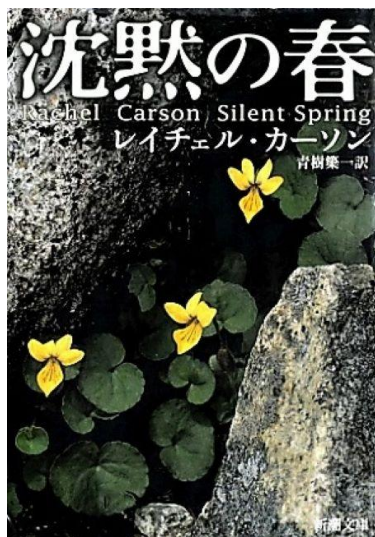
ジョンソン政権は、1963年12月 クリーン・エア法 Clean Air Act（大気浄化法、ケネディ提案の引き継ぎ）、1964年 ウィルダネス法 Wilderness Act（原生自然法、未開発地域を国家的に保護し、約900万エーカーを指定）、1965年 自動車汚染防止法（Motor Vehicle Ordinance）および水質法 Water Quality Act 改正、1966年 絶滅危惧種保護法（初の包括的法）、1968年 ワイルド&シーニックリバー法 Wild and Scenic Rivers Act、全米トレイル法 National Trails System Act の法制度を整備するなど、後の環境保護庁（EPA）の設立（1970年、ニクソン政権下）につながる流れの一端を担ったと言える。

### 3. その後の経緯

レイチェル・カーソンは1980年にジミー・カーター大統領から死後大統領自由勲章（Presidential Medal of Freedom, posthumous）を授与された。

### 4. 読書会での意見交換

前述の「思史の会東京」読書会では、本書との関連で、①今日的な環境保護の課題である二酸化炭素排出と気候変動、特に地球温暖化への国際社会の取り組み、②世界各国の化石燃料使用状況（欧米、アジア）、③自動車の排気ガス規制と電気自動車への移行などについて意見の交換を行った。私は、アジア地域が世界の二酸化炭素排出量の半分以上を占め、クリーンエネルギーへの移行が大変重要なテーマであることを再認識した。



出所：新潮社